

輪廻轉生

愛甲次郎

修行の道を辿らば同行の先達擧つて輪廻轉生を信ずるを知るに至る。修行に關する書物を繙かば輪廻轉生を自明のこととせざるはなし。もし輪廻轉生を否定せば佛教の理論體系、根底より崩壊す。輪廻の枠より脱出することこそ教への出發點なればなれ。

然るに今日講演會ありて講師の僧侶乃至佛教學者にこのことを質さば明快なる答を得ることなし。韜晦して話題を避くるか、甚だしきはこれを露はに否定す。これ現代科學の批判を慮りてのことと疑はざるを得ず。さる禪家、全て世は空なれば輪廻といふことあるべからずと説く。これ大いなる誤りなり。空は勝義諦に係ることにして、輪廻轉生の如き世俗諦とは眞理の次元を異にすればかく論ずるは能はざるなり。

佛教は無我を説くものなれば、輪廻轉生を肯定せば輪廻するものは果たして何ぞと問はれて答に窮せむ。窮余の一策として生まれたるが唯識論なりとの説もこれあり。されどこれは二諦の差によりて説明せらるべきものなり。この點を明らかにせざれば現代人をして佛教の論理を受容れしむること叶はず。

余西藏佛教に接するに及び、その本問題に正面より取組むを知る。それ西藏佛教に惹かれたる所以なり。

轉生を唱ふるは独り佛教に非ざれど、佛教によれば轉生の境遇を決するは良きにつけ悪しきにつけその生涯の言行にしてこれをカルマ(業)と言ふ。福德を積まんと善行を志すに、善行を爲すはいと難し。この世にて良き事の多くは報酬ありてのことなり。良きカルマを積むには至らず。

現代人は轉生を信ずること難けれど、一度これを信ずれば利する所多し。人生終末期を迎ふれば何事も爲す氣力を失ふ。死して残るべきものなければ、もはや全力投球と言ふことあるべからず。金も女も名誉も全て虚しく、ただ坐して死を待つのみ。敢へて死せざるは單に死を怖るるが故なり。されどもし轉生と言ふことあらば死の際までの努力も有意義とならむ。人間再び生まれ變りて新たに人生を營む、則ち人生「やり直し」可能ならば現代人にとりては福音なるべし。古代人特に古代印度人は、人生を苦と看做しこれを繰返すを何にも増して厭ひき。されど現代人には轉生は、もし信ずるを得ば限りなく喜ばしきことなり。

(平成二十八年十二月二十九日受附)